



場所と場所とのつながりを 洞察するのが地理学

地理学は帝国主義とともに発展してきた学問です。帝国主義的膨張には風土や地域性などの場所に関する知識が必要だったからです。一方で、人間にはもともと知らない場所に対する好奇心があります。また、居住地域が広がっていくに従って地理的ニーズが高まってくる。このように地理学には、自然に発展してきたという側面もあり、社会科学の中でも歴史が古い学問の一つです。

高校時代までに学んできた地理は、ある場所の特徴を探るといったことに主眼をおいていました。しかし、大学レベルの地理学では、場所と場所とのつながりに関する洞察が必要

知識は吸収するものではない。 自分の経験を通じて創り出すものだ。

になります。つながりは自然にできるものはありません。人や企業などが介入することでさまざまな動きが発生します。その流れと、流れが生ずることによる場所と場所とのつながりの状態、さらにはその特徴を理解することが必要なのです。

最近では、交通機関の発達、IT技術の進展もあり、人、モノ、情報、資金の流通が高速化していますが、こうした社会環境の変化を踏まえ、場所と場所との関係、その中における個人や企業、政府といったさまざまなアクターの役割を学ぶことが大学レベルの地理学なのです。とりわけグローバル化する社会にあって、地理学は、世界の動静を理解するのに役立つ学問といえます。

「場所の空間」から 「フローの空間」へ

マニユエル・カステルの説く「場所の空間」「フローの空間」という概念があります。これまでの社会は、移動が限られた小さな場所の中でお互いに交流していました。高密度な地域内同一性の高い社会をベースとしているのが「場所の空間」です。しかし、「フローの空間」では、様相が違ってきます。地域を構成する人々の中で、移動性の差が拡大してくるのです。例えば、大企業であれば自分たちの論理で自由に行動することが可能ですが、地域に根ざした中小企業ではそうはいきません。資本と労働、大企業と中小企業の関係など、さまざまな格差が生まれてくるのです。

ジオポジションナリティの概念で 経済システムを分析

地理学を学ぶのにあたって重要なのは、オープンな姿勢で臨むというアプローチです。世界にはさまざまな経済システムがあります。人間性も違えば、文化的背景も違うし、政治形態も違う社会のもとに資本主義が成り立っています。そこに存在するあらゆる可能性を排除するのではなく、ありのままに認識すれば、人間や企業、政府が多様なファクターによってつながっており、お互いに影響しあっていることが見えてきます。つまり、さまざまな資本主義が混在しながら、グローバルな経済システムを構成しているのです。

韓国の場合、1997年の経済危機以降の政策改革によって、資本市場が自由化され、海外資本の流入など海外とのつながりが広がってきました。そして、新自由主義的な仕組みが導入され、既存の開発国家を中心とした経済システムに新たなチャレンジを与えました。経済地理において、こうした自国の経済のあり方やグローバル社会の新たな可能性を探っていくのも、1つの大きな課題です。

私の研究姿勢は、地域にこだわらずさまざまな場所で経済地理学の理論を試そうというところにあります。最近では、経済危機や経済発展パターンに関心を持っています。例えば、97年の韓国の経済危機とその後の発展パターンが地域の発展にどうつながっているか。アングロサクソンの経済が韓国にどう影響し

ているか。「ジオポジションナリテイ」という概念で考えています。

97年の経済危機以降、韓国は海外の経済とのつながりを拡大してきました。日本やアメリカとのつながりが中心だったのが、ヨーロッパや多くの開発途上国とのつながりへと広がってきたのです。そのつながりの中で韓国の経済がどうなっているのかを研究しています。興味深いことに、経済危機以降韓国では開発途上国に対する貿易や投資が顕著に増えています。大企業を中心に貿易ネットワークが広がっているのです。一方、金融面で見ると欧米の資金がかなり増えています。金融的な流れと貿易・投資の流れが乖離しているのです。

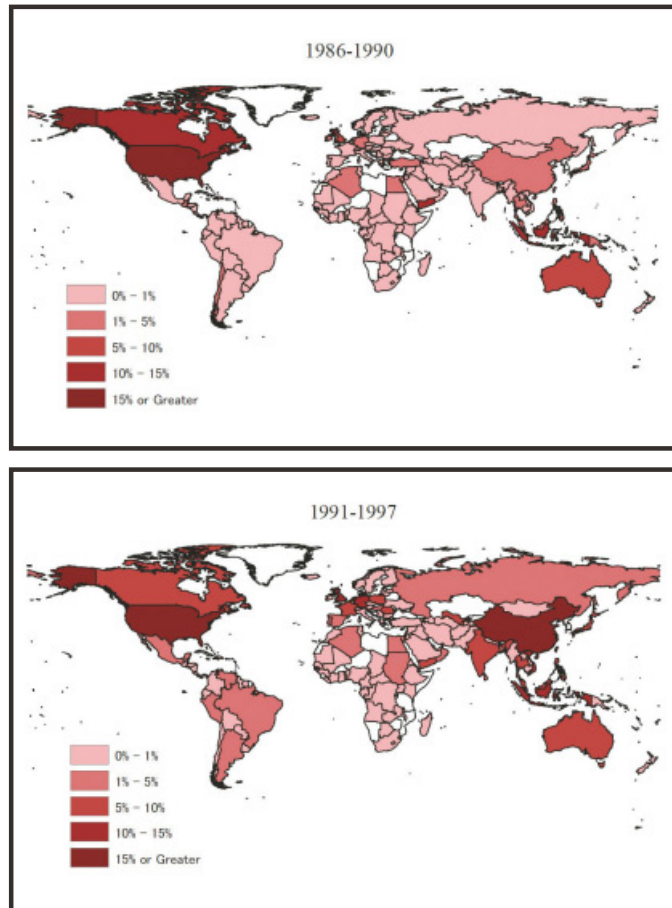
2007年、2008年の金融危機では、当初韓国はあまり影響を受けませんでした。しかし、1997年の経済危機後の改革で形成された新たなジオポジションナリテイによって、株式市場や為替市場は売りが先行してしまい、その後は金融危機の打撃を受けた開発途上国との貿易で苦労しています。つまり、経済危機後の韓国経済は海外の流れによる影響を受けやすくなってきたのです。こうした経済の構造転換をジオポジションナリテイという概念で説明しようとしているのです。

GIS活用で

新しい発想が生まれてくる

地理学教育・研究にあたっては、現場に出て調査することを重視しています。私もかつて

Geographical Distribution of Korean FDI



Source: Korea Export-Import Bank, Overseas Investment Statistics

て修士時代に、1カ月炭鉱村でインタビューして街の状況を分析したものです。昨年は本学の学生と一緒に池袋のチャイナタウンの調査を行いました。チャイナタウンという横

のです。まるで芥川龍之介の『藪の中』です。このような経験から、学生は教室ではなかなか得られない現場の大切さを知ることができたと思います。知識は吸収するものではなく、ある意味では自分の経験を通じて創り出すものなのです。

人は自分の経験によって見るものは、限られています。自分の考えが必ずしも正しいとはいえないのです。それを認識していないといけません。そのうえでネゴシエートする力が必要になってきます。さらには、社会的な立場によるパワー関係にも留意しなければなりません。

社会科学全般で空間についての研究が活発化してきました。テクニクとしては、GIS（地理情報システム）が有効に活用されています。データが盛り込まれた地図を見ると新しい発想が生まれてきますし、直感で捉えることができます。（談）

浜の中華街のようなイメージを抱きますが、実際に行ってみるとそんな風情は全くありません。そこで学生とともに池袋の商店街の人や中国人にインタビューを行いました。立場が違っていると、話の内容も事情も大きく異なり、だれの話が正しいのか全くわからなくなってしまうました。学生は、メディアで得た情報をベースに仮説を立てて情報収集に臨みましたが、現場ではメディアと違ってさまざまな立場からの多くの異なった発言が現れてきた

経済学研究科専任講師

徐鳳晩

(ソー・ボンマン)

1991年ソウル大学地理学部卒業、1993年ソウル大学地理学部修士課程修了。1996年～2002年ミネソタ大学地理学科 Instructor, Teaching & Research Assistant、2003年～2005年フロリダ国際大学 International Relations & Geography 学部客員助教授、2004年ミネソタ大学地理学博士号取得。2005年一橋大学経済学研究科専任講師。